

学位論文要旨

家庭科におけるケアリング教育の開発に関する研究

広島大学大学院人間社会科学研究科

教育科学専攻

教師教育デザイン学プログラム

D203504 藤井志保

目 次

序章	研究の背景及び目的と方法
第1節	問題の所在と研究の視点
第2節	ケアリング教育に関する概念の検討
	1. ケア・ケアリングの概念
	2. ノディングズのケアリング理論-6つの領域と4つの学習方法-
	3. ケアリング教育の概念
第3節	ケアリング教育に関する先行研究
	1. 看護におけるケアリング教育
	2. 学校教育におけるケアリング教育
	3. ケアリング教育の現状と課題
第4節	研究の目的と方法
	2. 研究目的
	2. 研究方法と本論文の構造
第1章	ケアリング教育の観点からみた家庭科教育
第1節	家庭科におけるケアリング教育の意義
	1. 社会的要請からの意義
	2. ケアリング教育からの意義
	3. 家庭科の独自性からの意義
第2節	家庭科におけるケアリング教育の現状
	1. 家庭科の学習指導要領にみられるケアリング
	2. 家庭科の教科書にみられるケアリング
	3. 家庭科における先行研究の分析
第3節	家庭科におけるケアリング教育に関する授業実践の分析
第4節	ケアリング教育の観点からみた家庭科教育の課題
第2章	生活の課題解決におけるケアリングの実態-「生活の課題解決プロジェクト」を通して-
第1節	「生活の課題解決プロジェクト」の概要
第2節	「生活の課題解決プロジェクト」にみるケアリングの様相
第3節	生活の課題解決におけるケアリング教育の課題
第3章	家庭科におけるケアリング教育の構想
第1節	家庭科におけるケアリング教育モデル
	1. 家庭科におけるケアリング教育の目的
	2. 家庭科におけるケアリング教育モデルの構想
第2節	家庭科におけるケアリング教育の学習方法
	1. ケアリングの6つの学習領域と家庭科の学習内容との関連
	2. 家庭科におけるケアリング教育の学習方法
第3節	家庭科におけるケアリング教育の授業開発の観点
第4章	ケアリング育成のための4つの学習方法に基づく授業開発
	—中学校家庭科「地域の方との交流会」授業実践の検討—
第1節	題材「地域の方との交流会」の概要
第2節	ケアリングの観点からみた「地域の方との交流会」授業の分析
第3節	「地域の方との交流会」におけるケアリング育成の考察
第5章	長期的ケアリングを要する家庭科授業の開発
	—中学校家庭科「幼児とのふれあい体験」授業実践の検討—
第1節	題材「幼児とのふれあい体験」の概要
第2節	「幼児とのふれあい体験」を通じた中学生のケアリング意識の変容プロセス
第3節	「幼児とのふれあい体験」に対する幼児の保護者の意識
第4節	「幼児とのふれあい体験」におけるケアリング育成の考察
終章	総括
第1節	本研究で得られた知見
第2節	本研究の限界と今後の課題

序章 研究の背景及び目的

本研究は、家庭科教育をケアリング教育の観点から検討し、家庭科におけるケアリング教育の理論と方法について考察し、授業開発することを目的とする。具体的には、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想した上で授業を開発し、授業実践により子どものケアリング生成過程を実証的に検討する。

近年、家庭や地域そして学校での子どもたちの人間関係が希薄化していることが問題視され、現代の教育においては、人と人との関係性を築き、他者を思いやることのできる人間の育成が求められている。

ノディングズ (2007, p. 11) は、「ケアすることとケアされることは根本的な人間のニーズである。私たちは誰もが他の人からケアされる必要がある。」と述べ、教育におけるケアリングの必要性を強調している。そして、ケアリングの6つ学習領域（自己へのケアリング、身近な人へのケアリング、見知らぬ者や遠い他者へのケアリング、動物、植物、地球へのケアリング、人工的世界へのケアリング、理念へのケアリング）とケアリングを育成する4つの学習方法¹⁾（＜モデリング＞は「ケアリングの関係に引き入れ、ケアしケアされる喜びを子どもと共有する」、＜対話＞は「語り合い、傾聴し合い、分かち合い、応答し合う営み」、＜実践＞は「ケアリングの成立を目指す努力を分かち合う機会」、＜確証＞は「共感や思いやりのある感知が、鼓舞され、高められ、最終的に反省と関与を伴って奨励される」こと）を提唱している。

人間関係が希薄化し、人と人とのつながりが重要視される現代において、ノディングズが主張するように教育の根底には、人と人とお互いを受容し、応答し合う相互の関係性であるケアリングが必要であると考えられる。また、人は、ケアによってつながり、その関係性の上により良く生きることができ、自己を成長させることにつながると考えられる。つまり、人との相互の関係性を基盤として、人は自己理解を深め、より良く生きることができるとはなからうか。

以上のことから、本論ではケアリングを、自分をかけがえのない存在としてケアし、他者を尊重し、他者からの働きかけに応答し、互いに認め合う者同士の結びつきとし、実際のケアを媒介とする関係性を育む教育をケアリング教育と捉える。ケアリング教育は、看護や学校教育でも各教科教育、特別の教科道徳、学級経営などで広く実践され、その有効性が示されている。しかし、ケアリングはケアした人とケアされた人の双方向からの分析が必要であるが、一方向的な分析にとどまっている報告が多くみられる。学校教育の中でも、人と人との関係性を軸として生活について学ぶ家庭科教育をケアリングの視点で見直すことは意義がある。

そこで、本研究は、子どもの生活実態におけるケアリングを、ケアした人とケアされた人の双方に着目して、その様相を踏まえた上で、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想する。そして、実際に子ども自身の生活と結びつけながら、ケアリングを子どもたちに育むことを実現する授業を開発する。

本研究は次の手順で進める。まず、文献研究により、ケア、ケアリングの概念を整理するとともに、家庭科教育をケアリング教育の観点から検討し、教科としての課題を明らかにする。そして、その課題を検討するため、子どもの実生活での課題解決の実状について調査・分析し、その結果を踏まえて、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想する。そして、この授業モデルをもとに、家庭科におけるケアリング教育の授業を開発し、授業実践を行い、学習過程を分析・検討する。

第1章 ケアリング教育の観点からみた家庭科教育

本章では、家庭科におけるケアリング教育の意義を明らかにするとともに、家庭科の学習指導要領や教科書の記述、先行研究や先行授業実践をケアリング教育の観点から分析し、家庭科教育の課題を提起した。

ケアリングは子ども自身がその生活の中で、家族、地域の人々や、様々な状況にある人ともかかわりあひながら、互いにケアし、ケアされながら生きていることを、単に知識や技能の習得にとどまらず、実践的・体験的に学ぶことで実感を伴って習得できるのではないかと考えられる。ケアした人が、ケアされた人からケアされることもあり、その関係性が入れ替わることもあるように、人は他者とのつながりの中

で、生活者としてより善く生きようとしている。この考え方は、自立と共生をめざす家庭科教育の根幹であり、人との関係性を軸として、生活について学ぶ家庭科をケアリングの視点で検討することは意義がある。家庭科における学習指導要領の記述内容を、貴志（2008, pp. 80-85）も分析に用いている能力領域²⁾別に分類すると、人との相互の関係性や自分自身を見つめる領域<自己理解・他者認識・社会的技能>に関しては主に「A 家族・家庭生活」の内容に、<生活に関わる科学的認識>や<生活に関わる技術や技能>は「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」、そして<責任ある意思決定>はすべての内容において確認され、ケアリング教育の観点が内包されていることが明らかになった。そして、中学校技術・家庭科（家庭分野）の教科書の記述を、人と人との相互の関係性の視点から分析すると、自分と家族そして地域社会、さらに多様な他者との共生に関するケアリングの視点が多く含まれていたが、技能の習得が中心となりやすい衣生活や食生活に関する内容においては、教師の実践的指導力に任されていることが明らかになった。

家庭科においてケアリングに焦点をあてた先行研究や先行授業をみると、中学生と高齢者との交流（例えば、多々納他，1995；角間，2009）、乳幼児とのふれあい体験（例えば、佐藤，2004；考藤他，2016）などの世代間交流を通して人との関係性を学ぶ授業実践研究は多くみられた。しかしながら、ケアリング教育の観点から検討された家庭科における先行研究は些少であった。その中でも、貴志（2007, p. 79）は、家庭科におけるケアリング教育の意義を「科学的認識と技術の統合を図り、自己の生活にかかわる人と人や、人との倫理的配慮を伴う関係性の構築に焦点をあてた総合論」であると示し、カリキュラム開発を行っていた。また、鎌野・伊藤（2009, pp. 41-50）は、中学生の幼児とのふれあい体験をケアリングの視点から検討しているが、中学生側のみを分析対象として、一方向的な分析にとどまっているといえる。しかし、ケアリングは双方向（例えば、中学生側と幼児側）からの分析が必要である。家庭科にケアリングの視点を援用することで、子どもは他者とのかわりの中で自分の生活を見つめ、生活の課題を見つけ改善し、そして、家族や他者と共に新たな生活を創造していくことができると考えられた。

以上のことから、ケアリング教育の観点からみた家庭科教育の課題として、次の3点が提起された。1つ目は、家庭科の内容にはケアリングの視点が内包されているが、教師の題材の扱い方によっては知識、技能の習得にとどまりがちであるため、例えばそれを誰かのために生かせるかという問いなどを学びの過程に組み込み、深い学びとする教師の支援が必要である。2つ目として、授業分析においては、ケアする側とケアされる側の双方向からの検討が必要である。3つ目として、家庭科におけるケアリングの視点をどのように導入するか、衣食住、消費生活、環境などの学習内容や子どもの発達段階に沿って整理し、その方法論を示す必要性が示された。

第2章 生活の課題解決におけるケアリングの実態 - 「生活の課題解決プロジェクト」を通して -

本章では、子どもの日常生活における生活の課題解決におけるケアリングの実態を明らかにし、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想するための示唆を得ることを目的とした。

ケアリングに関する学習経験のない中学校3年生を対象として、生徒はどのようにケア行為を日常生活において行っているのかを把握するため、生徒の日常生活におけるケアリングに着目し、生徒が自分の生活の課題に向き合い、家庭科の学習を生かして解決する題材「生活の課題解決プロジェクト」を実践し、生徒が生活課題の解決をケア行為と捉え、誰のため（ケアの対象）に、何をどのような方法で解決するか（ケアリングの方法）の実態を調査した。そして、ノディングズ（1997）が提唱したケアリングの6つの学習領域、ケアリングを育成する4つの学習方法の観点から分析した。

その結果、生活課題を設定する前に想起した内容を、ノディングズ（1997）による6つの学習領域別にみると、多くの生徒が、身近な家族を想起して生活課題に取り組みたいと考えていた。実際に生徒が課題解決で実施した方法をノディングズの4つの学習方法の観点から検討すると、①<モデリング>を

日常生活さらには家庭科の授業において意識的または無意識的に行い、ケアリングのモデルとしていたこと、②日常の家族の言葉や行動を<モデリング>しく<対話>によって課題解決した生徒が多いこと、③「インターネットなどからの情報」は<モデリング>にはなるが、家族との<対話>が生活課題の解決方法を決定する要因になっていたこと、④「家庭科の授業での学習」が課題解決に役立った生徒が多く、特に実体験を伴う調理実習や衣服実習での教師の師範、高齢者疑似体験などが<モデリング>の機会になっていた、等の特徴がみられた。「生活の課題解決プロジェクト」授業終了後に実施した生徒間での振り返りに関する自由記述を、KJ法により分類すると、【自分のことにとどまらず家族や誰かのために課題解決していきたい】が最も多く、自己へのケアから、他者へと領域が広がっていることが読み取れた。次いで【仲間の実践を自分に照らし合わせて考えた】【新たな発想や見方・考え方、視点を課題解決に生かしたい】の順に多かった。

生徒が行った生活課題解決をケアリングの視点からみると、生徒のケアリングを育むための課題として、次の3点が提起された。1つ目は、ケアリングの<実践>を導く支援の必要性である。教師は生徒のケアリング経験の実態を踏まえた上で、家庭科の授業において、「家庭での生徒の生活実態」と「家庭科の学習」を往還させながら、<モデリング>と<対話>を繰り返し取り入れて学習する機会を設定することによって、ケアの対象・内容・方法の拡大、さらには生徒のケア行為<実践>を導くことに寄与できるのではないかと考えられた。2つ目として、生徒間での<対話>を取り入れた学習方法の必要性である。生徒間での交流を通して、生徒がケアの対象を自分自身のことにとどまらず、家族やその他の対象に拡大していた。また、その際には、各生徒が課題解決に<モデリング>や<対話>などの4つの学習方法を用いた実践を互いに提示しながら交流することが有効であった。他生徒の実践から得られた新しい視点の獲得は、生徒にとって自己から他者へとというケアリングを育む機会となり、新たな質のよい課題設定や適切な解決方法の選択に導くと期待される。今後は家庭科の授業において、いかに双方向の<対話>を意図的に取り入れるかを検討することが必要であると考えられる。3つ目として、<確証>を重視した学習方法の必要性である。生徒が<実践>したことによる相手の変容を具体的に生徒に伝え、ケアリングが生成された経験を意識化させる支援が重要である。

第3章 家庭科におけるケアリング教育の構想

本章では、第1章・第2章を踏まえ、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想し、それを基にケアリング教育の授業を開発する観点を提起することを目的とした。

福田(2004, p.19)は、「生活実践に働く知識や思考および価値観や技能などを、子ども自身が認識し、科学的に吟味して、他者への倫理的配慮と共に、自分の状況を判断した未来志向的な生活実践が必要」と家庭科教育の課題を指摘していた。この課題解決の一助として、家庭科にケアリングの視点を導入することによって、「他者への倫理的配慮と共に」自分の置かれている状況を判断し、意思決定する、つまり、生活者としてケアリングの視点を身につける家庭科の授業を創造することが可能となると考えられる。そこで、家庭科におけるケアリング教育の目的を、「他者への倫理的配慮と共にケアを媒介とする関係性を築き、維持する生活者としての生活実践力の育成」と捉えた。そして、家庭科におけるケアリング教育モデルを、それを家庭科教育で育む生活実践力とのかかわりで、ノディングズの理論をもとに、6つの学習領域と4つの学習方法を援用した構造図として提示した。

家庭科の学習は、時間軸に人の成長を置き、空間軸として、自己から家族(家庭生活)そして学校や地域社会へと広がっていく。そこには生活行為(ケア)があり、自立をめざす自己は、人とのかかわり(ケアリング)を通して、生活実践力を身につける。よって、授業開発を行う際には、6つの学習領域(①自己へ②身近な人へ③見知らぬ人や遠い他者へ④動物・植物・地球へ⑤人工的世界へ⑥観念へのケアリング)との関連を整理することで、その授業で身につける力や目指す目標を明確にできると考えられた。また、家庭科では、知識・技能を習得するだけでなく、科学的認識と共に、なぜ必要か、どのよ

うな方法で、誰のために、などが重要となる。そのため、学習方法は実践的・体験的な価値の実践の場を設ける。具体的にはノディングズの提唱した4つの方法を援用するにあたって、〈モデリング〉では模倣できる事例や他者と出会いを仕組み、〈対話〉では自分の生活知を他者との交流し、役割演技などで立場の転換場面を設定し、〈実践〉では家庭・地域の教育力を生かし、他者との出会いを設け、知識・技能の習得にとどまらずそれを統合し実践し、〈確証〉では子ども自身の省察に加え、関わった他者の変容を子どもに伝え、ここでのケアリングの生成をめざすことが有効であると考えられた。

以上のことから、家庭科におけるケアリング教育の授業開発の観点として、次の5点が提起された。①ケアリングは双方向の応答性を重視するが、最終的に自己理解をめざす、②ケアリングの相互性に気付くために、自分以外の立場を実体験できる、立場の転換や、客観視できる場面を設ける、③なぜケアが必要なのか、どのようにケアするとよいか、知識・技能だけではなく、状況判断（責任ある意思決定）や科学的認識と共に学ぶ、④生活の中にあるケアを学び、課題解決し、葛藤できる場面を重視する、⑤家庭と連携し、地域社会の教育力を生かす、であった。

第4章 ケアリング育成のための4つの学習方法に基づく授業開発

— 中学校家庭科「地域の方との交流会」授業実践の検討 —

本章は、第3章で構想した家庭科におけるケアリング教育モデルをもとに、中学校家庭科における授業を実践し、それをケアする人とケアされる人の双方向から分析することによって、中学生のケアリング生成過程を実証的に検討し、家庭科におけるケアリング教育の課題を明らかにした。

研究方法は、ノディングズが提唱した4つの方法〈モデリング〉〈対話〉〈実践〉〈確証〉を援用して、中学生と高齢者とのかかわりを取り入れた家庭科授業として、題材「地域の高齢者との交流会」を実践し、中学生と高齢者の双方向から分析した。本実践は、地域の高齢者を招待し、中学生が既習の栄養や献立作成の知識・技能を生かし、栄養バランスのとれた料理を作り、高齢者と食事をしながら交流を深める授業であった。なお、授業実践後に、授業に参加した中学生と高齢者を対象に質問紙調査を実施した。

その結果、交流会に対して、中学生は98.6%、高齢者は81.9%の者が満足していた。しかし、中学生は高齢者の満足意識を24.7%と推測しており、両者間に意識のずれがみられた。両者に満足意識の理由を自由記述で尋ね、その回答をKJ法によって分類し、図解を生成した。中学生の理由は【ケア経験を通じた食に関する知識・技能の習得】【人とかがわる困難さ、失敗体験】【双方向のかかわりを実感】

【人のために他者と協働】【相手の喜びが自分の喜びになる経験】【自分を振り返る機会】の6つに大別され、中学生は高齢者との交流会を実践したことで、調理技能の向上や、食の知識を習得できたと捉えていた。一方、高齢者の理由は、【中学生の企画運営力】【交流会時に中学生から気遣いを実感】【一連の取り組みで中学生からの気遣いを実感】【大人との接し方を学ぶ機会】【高齢者自身を振り返る機会】の5つに大別され、高齢者は気遣う中学生の企画・運営の中にもてなす気持ちを感じ、満足を得たと推察された。さらに、両者の関係をKJ法による図解からみると、中学生の気遣いを高齢者は受容し、応答していることから、ケアリングが生成していると推察された。また、中学生は、協働して企画・運営し、達成感を感じていることから、中学生間においてもケアリングが生成されたと推察された。一方で、中学生が失敗と捉えていたことも、高齢者は気遣いであると受容しており、これが両者の満足意識におけるずれを生じさせていたと推察された。中学生は高齢者や友達など他者のために対話を重ね実践することを通して、高齢者によるケアだけでなく、友達からのケアにも気付くとともに、自分を振り返る中で課題を見つけていた。一方で、中学生だけでは認識できないケアリングの存在も明らかになった。つまり、教師が高齢者の思いを伝える手立てをとることで、中学生はケアリングに〈確証〉を得ることが可能となるのではないかと考えられた。

中学生におけるケアリング生成を促す授業の課題として、次の3点が提起された。1つ目は、ケアリングモデルにおける教師の果たす役割の再検討である。ケアする人とケアされる人とのケアの捉え方のず

れをどのように中学生に還元するかは重要である。特に、ノディングズの提唱する4つの学習方法の〈確証〉の段階において、中学生には認識できないケアリングが生じている場合、中学生にケアリングを意識化させる教師の支援が必要となる。2つ目は、自己へのケアリングサイクル（ケアされた経験をもとに、また他の人をケアしていくというように、ケアによって人と人とがつながっていくこと）の検討である。ケアリングは最終的には自分を理解し、自分をケアできることが重要である。他者をケアしようとする自己は、自己肯定感を有し、生活がよりよくなるように自身に働きかける力を備えていなければ、他者をケアすることは困難であろう。3つ目は、授業計画におけるケアリングの4つの方法の捉え方の検討である。本実践においては、中学生と高齢者のケアリング生成という観点から、高齢者との交流会の場をケアの〈実践〉と設定して、ケアリングの4つの方法を適用した授業計画を設定した。しかし、本授業実践の分析を通して、各授業場面における活動の中においても、各中学生に〈モデリング〉〈対話〉〈実践〉〈確証〉の4つの方法が適用されていたのではないかと推察された。

第5章 長期的ケアリングを要する家庭科授業の開発

—中学校家庭科「幼児とのふれあい体験」授業実践の検討—

本章は、中学生による長期的ケアリングを必要とする題材「幼児とのふれあい体験」を開発し、それを中学生のケアリング意識、幼児の保護者の意識に着目して分析し、中学生と幼児との長期的なケアリング育成について実証的に検討した。

本授業の対象者は同じ敷地内の幼稚園の年中幼児と中学2年生であり、中学生は幼児の心身の発達について学んだ知識を生かしながら、1年間幼児とペアを組み交流を行う授業を実施した。さらに、中学生がペア幼児の理解を深めるために、ペア幼児の家族と話す会を実施するとともに、衣生活分野の学びとも関連させて、手縫いの技能を高めながら幼児にプレゼントするバンダナの製作を取り入れた。なお、授業にはケアリング教育モデルの4つの方法〈モデリング〉〈対話〉〈実践〉〈確証〉を採用した。本授業は、1年間を通して、ケアリングの視点を適用したペア幼児とのふれあいを軸として、中学生が幼児の心身の発達を理解することにとどまらず、ペア幼児と継続的な交流を通して、実践的・体験的な学びを展開し、自分より幼い子どもへの理解とかかわり方を学ぶと共に、自分自身を見つめる（自己へのケアリング）契機となることを目指した。

幼児とのふれあい体験における中学生の意識の1年間にわたる時間的変容を把握するため、SD法による質問紙調査を実施した結果から特徴的な3名の中学生を抽出し、中学生の幼児に対する言動や感情の変容、周囲から受けた影響などについてインタビュー調査を行った。そして、TEM (Trajectory Equifinality Model: 複線経路・等至性モデル; サトウ編, 2009) を用いて分析した。ラベルを、出来事の時系列に左から右へと配列することで、ふれあい体験における中学生の言動やふれあい体験に対する感情のプロセスを抽出した。また、対象中学生にかかわる他者の言動も分析することで、対象中学生の言動や幼児に対する感情の変容及び維持要因を明示することを試みた。TEM図からは、ふれあい体験を経験することにより、主に①中学生に生じる幼児を思いやる心の醸成とかかわりの工夫、②幼児の多様性・多面性を知ることができる、という2つの効果が明らかとなった。さらに、ケアリングの視点から分析した結果、中学生にとって、モデルになる他者や対話する他者の存在の重要性、そして困難に出会い、失敗を乗り越えた成功体験、そして中学生への幼児の思いの還元効果などが明らかになった。また、中学生同士の対話による振り返り、ふれあい体験後にその内容を幼稚園の教師や保護者へ発表してまとめるなどの活動が〈確証〉となると考えられた。

ケアされた対象が幼児で、ケアリングの関係性を見取ることが困難なため、幼児の保護者に質問紙調査を実施した。調査内容は、幼児とのふれあい体験やバンダナのプレゼントに対する反応や意識、中学生とのふれあい体験をどのように捉えているかを自由記述で尋ねた。その結果、中学生とのふれあい体験に

関することを 87.5%の幼児が家庭で語っていた。保護者の記述内容から、中学生と幼児との長期的なケアリング育成のための2つの課題が提起された。1つ目は、中学生とのふれあい体験を通して、家庭科教師、幼稚園教師、保護者が連携することである。この連携によって、幼児・保護者間で双方向の会話が成立し、その内容が媒介となり、幼児と中学生とのケアリングの生成にも影響を及ぼすと推察された。2つ目は、中学生とのふれあい体験に対する幼児や保護者の思いを、適宜中学生に還元することである。この中学生への還元は、ケアリングの4つの学習方法の<確証>になると考えられた。

終章 総括

本研究は、家庭科をケアリング教育の観点から検討し、ノディングズの4つの学習方法と6つの学習領域を適用した家庭科におけるケアリング教育モデルを構想し、そのモデルを導入した家庭科の授業開発をおこない、子どものケアリング生成過程を実証的に検討した。

ケアリング教育モデルを開発するにあたり、ケア・ケアリングの概念について、先行研究を基に検討し、本論におけるケアリングの定義を明らかにした。さらに、ノディングズの理論の中から、ケアリングを育む4つの学習方法と、ケアリングの6つの学習領域をこのケアリング教育モデルへ適用して、子どもたちにケアリングを育成し、自立と共生に向けての生活実践力を育むことをめざした。また、子どもの日常生活におけるケアリングの実態を「生活の課題解決プロジェクト」を通して明らかにし、ケアリング教育モデルを構想した。本研究では、家庭科の中で、ケアする人とされる人が存在し、さらには自己から家族、他者そして地域へとつながりを広げられる題材に着目し、ケアリング教育モデルを導入した。その効果については子ども（ケアする人）と幼児や高齢者（ケアされる人）の両者に意識調査を実施し、双方向から分析し検討した。その結果、モデルとなる事例や他者との出会い<モデリング>が、子ども自らがめざすゴールを設定する意欲につながったこと、仲間や家族、教師との<対話>により、ノディングズの6つの学習領域を広げる視点で活動しようとしていたこと、またケアした人の反応を子どもへ返す<確証>を取り入れることが、子どもたちにケアリングの生成を促すことなどが明らかとなった。

本研究において、家庭科におけるケアリング教育モデルを構想し、授業開発できたことは、家庭科の授業において単に知識や技能の習得にとどまらず、子どもたちが自分以外の他者とのかかわりの中で、人をケアしたり、ケアされたりする経験と共に、実感を伴って生活の課題を解決する生活実践力の習得に有効であったと考えられる。また、「誰かのためにできることはないだろうか」「相手にとってどうすることが良いのだろうか」というように、自分以外の誰かのことを考えながら身につけた生活実践力は、子どもたちが将来、相手の価値を尊重し、人との関係性を築き、他者を思いやることのできる人間として成長するために必要であると考えられる。家庭科においてケアリング教育を導入することによって、家庭科における各領域を繋ぐだけでなく、各教科をつなぐことに寄与できると考えられる。

本研究の意義と特色は次の3点にある。

第一は子どもの日常生活におけるケアリングに関する実態調査によって、子どもの生活の課題解決の過程を明らかにし、それに基づいて家庭科におけるケアリング教育モデルを構想したことである。第二は家庭科教育におけるケアリング教育モデルを具現化した授業を開発し、家庭科における授業実践においてケアリングを「双方向」から捉えて検証し有効性が実証できたことである。第三はノディングズのケアリング理論を適用することにより、家庭科においてケアリングを育むためには4つの学習方法のうち<確証>が重要であることを明らかにしたことである。

しかし、次のような課題が残されている。

第一に、本研究では中学生を対象として家庭科におけるケアリング教育モデルを具現化した授業開発を行ったが、ケアリング教育は小・中・高等学校の家庭科で実施される必要があるため、各校種における家庭科授業を開発することである。第二に、ケアリング教育は家庭科だけで担えるのではないため、他教科との教科横断的なカリキュラムや家庭、地域と連携したカリキュラムを開発することである。第

三に、授業における子どものケアリング生成の評価方法の検討である。

注

- 1) ノディングズが提唱した4つの学習方法である (modeling) (dialogue) (practice) (confirmation) は多様な訳語があるが本論では下記の文献の訳語に従った。橋迫和之・池水佐千子(2003)「教育におけるケアリングの意義と課題—ネル・ノディングズのケアリング理論を中心に—」宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 第10号, pp73-89
- 2) DeSeCo (デセコ, Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations) とは、国際化と高度情報化の進行とともに多様性が増した複雑な社会に適合することが要求される能力概念「コンピテンシー」を、国際的、学際的かつ政策指向的に研究するため、経済協力開発機構 (OECD) が組織したプロジェクトである。この DeSeCo によって示されたキーコンピテンシーと、河崎 (2004)・中間 (2002) らの示した家庭科の学習で期待される能力を参考に、貴志 (2009) が提案している6つの能力領域を援用した。その6つの能力領域とは①自己理解、②他者認識、③社会的 (関係的) 技能、④生活に関わる科学的認識、⑤生活に関わる技術や技能⑥責任ある意思決定である。

引用・参考文献

荒井紀子 (2012) 『パワーアップ! 学びつながり発信する家庭科』大修館書店。

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25, 95-107.

Buber, Martin (1965) "Education, " Between Man and Man, Macmillan, New York, 98-122.

中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書『技術・家庭 (家庭分野)』開隆堂。

中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書『新編新しい技術・家庭 (家庭分野)』東京書籍。

中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.p

中央教育審議会 (2011) 「食に関する指導体制の整備について (答申)」

www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm (2020年8月14日閲覧)

デューイ, J (著) 宮原誠一 (訳) (1957) 『学校と社会』岩波文庫。

El-Amin, Avril M (2015) A Descriptive Case Study: How Teachers Understand and Demonstrate Caring Grand Canyon University 286p Pub No:3704324 Ed.D

遠藤幸子, 新井美保子, 室戸真也, 三輪幸子 (2017) 「介護学生が体験したヒューマンケアリングの過程—介護老人福祉施設における高齢者との関わりを通して—」『東海学院大学紀要』11, 111-122.

江崎由里香 (2017) 「中学生の食に関する QOL を高める要因の検討—親子の共食に着目して—」『教育心理学研究』65 (2), 239-247.

藤井志保・伊藤圭子 (2009) 「地域の高齢者の方との交流会の取り組みを通して」日本家庭科教育学会中国地区会 (編) 『開かれた個を育成する家庭科カリキュラムの開発と授業実践』教育図書, 118-127.

藤井志保・中山 芙充子・伊藤 圭子・高橋 均 (2017) 「中学校家庭科における幼児とのふれあい体験学習アクティブラーニングによる授業モデルの開発と実践」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』(45), 245-255.

福田恵子 (2010) 「家庭科教育における問題解決学習の課題と学習方略」『日本家庭科教育学会誌』

53(2), 71-81.

- 福田恵子・錦織教子・青木淳子 (2012) 「高等学校家庭科におけるホームプロジェクト指導に関する課題」『地域学論集』9(2), 53-63.
- 福田恵子・後藤真理 (2012) 「実践的推論を導入した問題解決学習の効果—ホームプロジェクトにおける学習法力の変化の観点から」『日本家庭科教育学会誌』55(3), 150-161.
- 福田公子 (2004) 「序章生活実践と家庭科教育」福田公子・山下智恵子・林未和子 (編) 『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版.
- 福田公子 (2020) 「第1章家庭科をなぜ学ぶのか」多々納道子・伊藤圭子 (編) 『実践的指導力をつける家庭科教育法』大学教育出版.
- 福祉士養成講座編集委員会 (2004) 『新版社会福祉養成講座4 児童福祉論第2版』中央法規出版, 476.
- 二川早苗 (2015) 「ケア倫理の社会的可能性—ノディングズのケア論からのアプローチ—」『筑波大学哲学・思想論叢』筑波大学哲学・思想学会 編 (33), 62-44.
- ギリガン, C (著) 岩男寿美子 (訳) (1986) 『もうひとつの声——男女道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店.
- ハイデガー, M (2013) 熊野純彦 (訳) 「存在と時間」岩波文庫.
- 半田千鶴子・豊田充崇 (2008) 「伝え合う力」を育成するための国語科授業改善例の報告: 教育的ケアリングの視点からのアプローチ」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』18, 151-159.
- 橋迫和之・池水佐千子 (2003) 「教育におけるケアリングの意義と課題—ネル・ノディングズのケアリング理論を中心に—」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』10, 73-89.
- 林泰成 (2000) 『ケアする心を育む道德教育; 伝統的な倫理学を越えて』北大路書房.
- 樋口康子 (1993) 「看護におけるヒューマンケアリング—多元論的研究方法を求めて—」『看護研究』26(1), 33-39.
- 広井良典 (1997) 『ケアを問い直す—〈深層の時間〉と高齢化社会』筑摩書房.
- 広井良典 (2000) 『ケア学—越境するケアへ』医学書院.
- 広井良典 (2020) 『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社.
- 堀内かおる (2020) 「生活の変化とこれからの家庭科教育」堀内かおる (編) 『生活をデザインする家庭科教育』世界思想社, 2-3.
- 星祥子 (2013) 「ネル・ノディングズのケアリング理論におけるケアの概念についての研究 —ケアが学校教育で果たす意義に注目して—」秋田大学教育学部研究.
- 池谷壽夫 (2016) 「脆弱性, ケアと道德教育」『了徳寺大学研究紀要』11, 117-129.
- 伊藤葉子・鎌野育代 (2009) 「家庭科における幼児とのふれ合い体験での中学生の学び: ケアリングという視点からの考察」『日本教科教育学会誌』32(1), 41-50.
- 伊藤葉子・倉持清美・岡野雅子・金田利子 (2010) 「中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響要因」『日本家政学会誌』61(3), 129-136.
- 伊藤優・市川舞・藤井志保 (2017) 「幼児とのふれあい体験による中学生の意識の変容」『就実教育実践研究』10, 23-34.
- 泉澤真紀 (2009) 「ケアリングは看護の何なのか—テクノロジー時代におけるケアの倫理と看護—」『北海道文教大学研究紀要』33, 1-10.
- 角間陽子 (2009) 「中学校家庭科におけるエイジング学習 (第2報) —学習形態別による効果—」『東北家庭科教育研究』18, 67-75.
- 鎌野育代 (2013) 「家庭科におけるケアリングの教育実践の検討」『千葉大学教育学部研究紀要』61, 227-232.
- 鎌野育代・伊藤葉子 (2009) 「家庭科における幼児とのふれ合い体験での中学生の学び: ケアリングとい

- う視点からの考察』『日本教科教育学会誌』32(1), 41-50.
- 鎌野育代・古重奈央・真田知恵子・伊藤葉子 (2010)「小・中・高・大学生の親・家族・地域・友人との関係性の発達」『日本家庭科教育学会誌』(53)3, 175-184.
- 金田利子・岡村由紀子 (2002)「育てられている時代に育てることを学ぶ(7) : 乳幼児教育における保育教育」『幼児の教育』101 (7), 9-17.
- 考藤悦子・片山美香・高橋敏之・西山修 (2016)「家庭科保育領域における触れ合い体験学習の意義と課題」『岡山大学教師教育開発センター紀要』6, 113-122.
- 叶内茜・倉持清美 (2018)「家庭科幼児ふれ合い体験における事例集作成の試み:実践事例の分類とヒアリング調査から」
- 春日キスヨ (2002)「ケアリングと教育 -痴呆高齢者介護倫理の変容と実務者研修教育-<特集>教育における臨床の知」『教育学研究』69(4), 484.
- 川畑和久 (2015)「地域ぐるみで子どもを包摂する教育のいとなみ : 「ケア」概念を教育に援用する(テーマB-1) 市民性教育の課題, テーマ型研究発表 [B] 発表要旨」『日本教育学会大会研究発表要項』74, 396-397.
- 河合隼雄 (2000)『日本のフロンティアは日本の中にある-自立と協治で築く新世紀-「21世紀の構想」懇談会』講談社.
- 川地仁美 (2013)「防災教育と関連付けた家庭科指導資料」『岩手県立総合教育センター研修部』
- 川喜田二郎 (2017)『発想法-改版-創造性開発のために』中公新書.
- 河崎智恵 (2004)『家庭科におけるキャリア教育の開発に関する研究』風間書房.
- 貴志倫子 (2004)「家庭科におけるケアリング教育の概念化」福田公子・山下智恵子・林末和子(編)『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版, 141-158.
- 貴志倫子 (2007)「ケアリング教育の視点からみた家庭科教育-高等学校「家庭」における授業プログラムの作成の課題-」『福岡教育大学紀要』56(5), 163-172.
- 貴志倫子 (2008)「家族間のケアの実態をふまえた家庭科におけるケアリング教育の開発」『広島大学大学院学位論文』
- 国立教育政策研究所プロジェクト (2012)「中学校・高等学校における理系進路選択に関する研究」理系文系進路選択に関わる 意識調査 -学校属性別集計結果の概要-
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/zokuseichi-report.pdf> (2022年7月7日閲覧)
- 広辞苑 (2018) 新村出(編) 岩波書店.
- 厚生労働省 (2004)「食を通じた子どもの健全育成(—いわゆる「食育」の視点から—)のあり方に関する検討会」報告書 https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/02/dl/s0219-4a_002.pdf (2019年9月22日閲覧)
- マーティン, J.R (著) 生田久美子 (監訳・解説) (2007)『スクールホーム〈ケア〉する学校』東京大学出版会.
- 松村康平・斎藤緑 (1991)『人間関係学』関係学研究所.
- メイヤロフ, M (著) 田村真・向野宣之 (訳) (1987)『ケアの本質:生きることの意味』ゆみる出版. (Original work published 1971)
- 宮本みちこ・岩上麻珠・山田昌弘 (1997)『未婚化社会の親子関係』有斐閣選書.
- モンゴメリ, C. L (著) 神郡博・濱畑章子 (訳) (1995)「ケアリングの理論と実践—コミュニケーションによる癒し」医学書院.
- 文部科学省 (2010)「子どもの心のケアのために—災害や事件・事故発生時を中心に—」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1297484.htm (2022年10月23日閲覧)
- 文部科学省 (2013)「平成24年度非常災害時の子どもの心のケアに関する調査報告書」

- https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/08/07/1337763_01.pdf (2022年10月23日閲覧)
- 文部科学省 (2015) 「学校における子供の心のケアサインを見逃さないためにー」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2014/05/23/1347830_01.pdf
(2022年10月23日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説技術・家庭科
文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編
- 文部科学省 (2016) 「中央教育審議会答申：幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2022年12月11日閲覧)
- 文部科学省 (2019) 「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/10/25/1412082-30.pdf (2021年1月20日閲覧)
- 文部科学省 (2020) 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」 https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext_jidou01-100002753_01.pdf (2022年10月23日閲覧)
- 文部科学省 (2021) 「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」 https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2022年10月23日閲覧)
- 村井実 (1987) 『新・教育学のすすめ』小学館.
- 永島すえみ (2013) 「わが国の看護におけるケアリング論の導入と研究の動向」『佛教大学教育学部学会紀要』12.
- 内閣府 (2013, p. 54) 「平成25年度小学生・中学生の意識に関する調査」第1章青少年 (小・中学生) を対象とする調査の結果, 第4節価値観
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf/b2-1.pdf> (2022年12月24日閲覧)
- 中村麻由子 (2015) 「教師が子どもを見るということ：共感的・ケアリング的なまなざしの実践的意味」『東京学芸大学博士論文』
- 中野啓明・伊藤博美・立山善康編著 (2006) 『ケアリングの現在ー倫理・教育・看護・福祉の境界を越えてー』晃洋書房.
- 中野啓明 (2011) 「観念へのケアリングを促す発問研究」『新潟青陵会誌』4, 25-33.
- 西田絵美 (2015) 「ケアリング教育としての母性看護学の可能性ー〈ケアリング〉を基盤とした看護師養成カリキュラム試案ー」『奈良学園紀要』3, 99-113.
- 西田絵美 (2018) 「看護における〈ケアリング〉の基底原理への視座：ケアリングとは何か」『日本看護倫理学会誌』10(1), 8-5.
- Noddings, N (1984) 「CARING:a feminine approach to ethics and moral Education」 Berkeley and Los Angeles. University of California Press, 64.
- Noddings Nel (1992) 「The challenge to care in school:an alternative approach to education. New York:teachers College Press.
- ノディングズ (著) 佐藤学 (訳) (2007) 『学校におけるケアの挑戦もう一つの教育を求めて』ゆみる出版. (Original work published 1971)

- ノディングズ (著) 立山善康・林泰成 (訳) (1997) 『ケアリング倫理と道徳の教育：女性の観点から』 晃洋書房. (Original work published 1984)
- ノディングズ (著) 井藤元・小木曾由佳 (訳) (2020) 『人生の意味を問う教室—知性的な信仰あるいは不信仰のための教育』 春風社. (Educating for Intelligent belief or Unbelief (Teachers College Press, 1993))
- 乗本秀樹 (2002) 『家庭科に学ぶ生活論と教育論—生きる力の周辺』 家政教育社.
- 岡田美智男 (2012) 「弱いロボット」 医学書院.
- 岡田美智男 (2016) 「人とのかかわりを指向する〈弱いロボット〉その展開」 『日本ロボット学会誌』 34(5), 299-303.
- 岡田美智男 (2017) 『〈弱いロボット〉の思考—わたし・身体・コミュニケーション』 講談社.
- 岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子 (2012) 「中・高生の家庭科における「幼児とのふれ合い体験」を含む保育学習の効果—幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連—」 『日本家政学会誌』 63 (4), 175-184.
- 小野謙二 (1978) 「本質編第1章家庭科教育の意義：第2節家庭科教育の性格：1家庭科教育の構造的な性格」 岡村喜美・宮川満・米川五郎編著『家庭科教育の研究』 教師養成大学・学部教官研究集会家庭科教育部会 学芸図書株式会社.
- リーダーズ英和辞典 (2000) 松田徳一郎 (監修), 池上勝之 (発行者) 研究社.
- 佐伯胖 (2017) 『子どもがケアする世界をケアする』 ミネルバ書房.
- 齊藤勉・高橋由香里 (2006) 「小学校におけるケアリング教育の研究」 『教育実践研究指導センター紀要』 20, 1-26.
- 鮫島峻 (1999) 『関係発達論の構築—間主観的アプローチによる』 ミネルバ書房.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーンヴァルシナー (2006) 「複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」 質的心理学研究, 5, 255-275.
- サトウタツヤ (2009) 「TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして」 誠信書房.
- 佐藤学 (1995) 『学びその死と再生』 太郎次郎社.
- 佐藤聖一 (2010) 「看護におけるケアリングとは何か」 『新潟青陵会学会誌』 3 (1), 11-20.
- 佐藤陽子 (2004) 「乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響」 『生活体験学習研究』 4, 35-54.
- 佐藤静 (2013) 「学校教育カリキュラムにおけるケアの実践知の観点：看護における〈技術 (テクネー)〉と〈思慮 (フロネーシス)〉の関係を手がかりに」 『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』 39, 53-62.
- 新谷咲華 (2010) 「学校における道徳教育の研究—ケアリング論を中心に—」 『創価大学大学院紀要』 35, 149-169.
- 総務省国勢調査 (2017) 世帯構造等基本集計
<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon3/pdf/gaiyou.pdf> (2020年8月14日閲覧)
- 末松孝治 (2014) 『人生で大切なことはすべて家庭科で学べる』 文芸社.
- 住野好久・中山芳一 (2010) 教育実践における発達支援・権利保障・ケアリングの三位一体性に関する研究 『岡山大学教育実践総合センター紀要』 10 (1), 21-30.
- 正保正恵 (2009) 「出産前からの継続的子育て支援—家庭科におけるケアリング教育の接続を考える—」 『福山市女子短期大学紀要』 35, 9-18.
- 多々納道子・三島香子・立石綾子 (1996) 「中学校家庭科における生活福祉教育の授業実践：高齢者との交流を通して」 『島根大学教育学部紀要教育科学』 30, 25-34.

- 土屋善和 (2020) 「生活を問い直すー批判的思考」堀内かおる (編) 『生活をデザインする家庭科教育』世界思想社, 34-35.
- 筒井真優美 (2018) 「ケアリングの概説 Overview of Caring 次世代の「看護医療」を探る」『KEIO SFC JOURNAL』18(2), 136-155.
- 内潟恵子 (2018) 「看護基礎教育におけるケアリングの意義 — 文献レビューからの考察 —」『東京情報大学研究論集』21(2), 113-126.
- 梅澤秋久 (2015) 「学校体育における教育学的ケアリングの地平」『日本女子体育連盟学術研究』31, 1-17.
- 梅澤秋久 (2016) 「運動格差を解消するための学校体育におけるケアリングの実証的研究」『横浜国立大学教育学会研究論集』3, 1-11.
- ワトソン, J (著) 稲岡文昭・稲岡光子 (訳) (1992) 『ワトソン看護論: 人間科学とヒューマンケア』医学書院, 41-47. (原典 Watson, Jean. Nursing: Human Science and health Care, Appleton Century Crofts. 1985)
- 山田恵子 (2017) 「スクールソーシャルワーク実践と教師のケアリングー課題を抱えた子どもへの協働を通して見えるものー」『早稲田教育学研究』8, 101-115.
- 安井絢子 (2010) 『「ケア」とは何かーメイヤロフ, キリガン, ノディングズにとっての「ケア」ー』『京都大学哲学論叢』37, 119-130.
- 安酸史子 (2016) 「ケアリングを取り入れた看護教育」『日本保健医療行動科学学会誌 特集論文』31(2), 10-13.